

平成 24 年度 8020 公募研究報告書抄録

研究課題名：周術期がん患者における口腔ケア体制確立のための QOL 研究

研究者名：古賀陽子¹⁾、高戸毅¹⁾、瀬戸泰之²⁾、森良之¹⁾

所属：¹⁾東京大学医学部附属病院 顎口腔外科・歯科矯正歯科

²⁾東京大学医学部附属病院 胃・食道外科

【背景・目的】平成 24 年度がん推進基本計画の重点的に取り組むべき課題の一つに、がんと診断された時点から早期に口腔ケアを介入することが推奨され、各種がん治療の副作用・合併症予防や軽減など、患者の更なる生活の質の向上を目指し、医科歯科連携による口腔ケアの推進が国策として新たに進められており、まさに質の高い、患者の QOL 向上型の口腔ケアを確立することが急務となってきた。そこで、われわれは、近年増加しているがん患者の口腔ケアの実践をサポートするためにも、口腔ケアが提供者側の一人よがりにならない、口腔ケア方法に修正が見込まれる質の高い口腔ケアを見直す必要があると考えた。本研究では、外科手術、化学療法、放射線治療を受ける頭頸部がん、食道がんの患者に対し早期より口腔ケアを実践し、1)患者の QOL および満足度評価、2)肺炎などの感染症の発症率を専門的口腔ケアが介入される前の患者と比較検討し、患者の QOL 向上型の口腔ケアの確立を目的とした。

【方法】Ⅰ.口腔ケアの介入：歯科医師、歯科衛生士によるブラッシング指導、歯石除去、それぞれのがん治療に応じた口腔内保湿、含嗽の指導、または歯科治療を行った。Ⅱ.患者満足度アンケート調査および集計：手術、化学療法や放射線治療終了後 3 か月時に口腔ケア指導に関するアンケート調査を行った。アンケート調査には、試作した『口腔ケア満足度』に関する調査票および口腔に関連した包括的な健康関連 QOL の評価の日本語版である GOHAI (General Oral Health Assessment Index)を用いた。Ⅲ.肺炎の発症率の比較検討：術後性肺炎などの感染症の発症率を検討するため、口腔ケア介入前の 2011 年 1 月 1 ～2011 年 12 月 31 日までの 1 年間における食道がん患者をコントロール群とし、口腔ケア介入後の本研究期間の頭頸部がんおよび食道がん患者の肺炎などの感染症の発症率を検討した。Ⅳ.既存の口腔ケア方法にフィードバックをかけ修正：Ⅰ～Ⅲのデータを統合的に解析することにより、口腔ケア指導を行う側にフィードバックをかける。

【結果・まとめ】Ⅰ.口腔ケア介入においては、頭頸部がん患者 (8 人) および食道がん患者 (39 人) の全例において行った。Ⅱ.患者満足度アンケート調査は、インフォームドコンセントの取得可能であった追跡・回答可能な 18 例において行われた。その結果、口腔ケアの認知度は 39%、原疾患が口腔と関係していることの認識度は 22%と低かった。また、術前に口腔ケアを行ってよかったとの回答は 89%であった。口腔ケアの内容で一番よかったのは、口腔ケアの重要性の説明が 44%であった。指導後に積極的に口腔ケアを行ったのは 83%、口腔ケアが『生活の質』をあげたと思われたのは 67%であった。また、GOHAI の結果により、口腔が手術などにより QOL を下げない傾向にあることが示唆された。Ⅲ.肺炎の発症率は口腔ケア介入前が 16.7%、介入後が 6.4%と減少していることが示された。Ⅳ.今後も定期的に歯科検診を受けたいと回答したのは 67%であったため、積極的に取り組んでもらえるように丁寧にわかりやすく、また 1, 2 回の指導だけではなく、入院中の定期的な follow も必要であることが示唆された。